

# 豊の国かぼす大使

豊の国  
(高山直樹氏提供)



「豊の国かぼす大使」は、大分県の代表的な特産カボスから名をとり、大使は大分県の産品はもとより、観光、産業、文化など、大分県の良さを広く内外により一層知っていただく活動をしてもらうために名付けました。大分県の発展にひと肌ぬいてもらおうという趣旨です。

## 豊の国かぼす特命大使 佐野 武

さの・たけし氏

国立がんセンター中央病院外科医長

昭和30年、杵築市生まれ。同49年、大分上野丘高校卒。同55年、東京大学医学部卒。東大病院第一外科を経て、平成5年から国立がんセンターに勤務。昭和61、62年にはバリのキューリー研究所に留学。胃がんの外科を専門とし、すでに1000症例以上の胃がん手術を行っている。日本胃癌学会、国際胃癌学会の幹事を務め、同学会合同の英文機関誌の編集も管理。英国外科医師会の胃切除手術講座の常任講師。国内では厚生労働省の胃がん手術に関する臨床試験の事務局を運営している。



## 独立した専門施設の 「がんセンター」必要

【父親(平成2年没)まで13代にわたって続いた杵築の佐野医院は、現在杵築市の管理下に「佐野家」として一般公開されている。今年は佐野家始祖の徳安(とくあん)生誕400年に当たるため、これを祝う記念祭を10月5日、杵築市商工会館で開いた。高校時代の同級生が集まった「ふろくく会(26期卒)があります。7年前に東京支部の集まりが50人ほどで始まったのですが、今では同級生160人ほどがメーリングリストに載っています。ことあるたびに大分市のメールが飛び交っていますよ。】

「ふろくく会」を通して、大分とのつながりがより深まったと感じています。高校時代の思い出話をするというより、自分たちの日常の生活を語り合う友人関係ができたと感じていますが、そのルーツはあくまでも大分県にあります。

子どものころは、学校から帰ると、いかに家を出て遊ぶかを考えていました。早く広い世界を見たいと思い、東京に出たのですが、最近帰郷するたびに杵築が好きになってきています。観光客も結構いるようですが、普通の生活が静かである城下町の風情が気に入っています。それで、以前よりは帰郷する回数が増え、いろんな人を案内して、城下を散策しています。

かぼす大使ということですが、今は東京でもカボスが広く認知されていて、大分県とは何の関係もないお店でも普通に売られます。フランスに留学していた関係もありワインが好きなのですが、和食の場合はお酒をいただきます。和食にはカボスは欠かせません。

【国立がんセンターは胃がん手術症例が日本1。佐野外科医長は個人での年間胃がん手術症例が日本で1番が2番と言われている。】

がんは死亡原因の第1位で日本人の3人に1人はがんで亡くなっています。

がん征圧には高度で専門的な医療を行う「がんセンター」が必要です。大分県でも

がん治療は、大学病院や国立・県立病院などを中心に行われていると思いますが、従来のシステムからは独立して総合的にがん患者を治療する高度な専門施設としての「がんセンター」が各県にひとつは必要です。がん征圧に取り組む拠点施設の「がんセンター」設立は世界的な流れでもあります。

